

昭和二十四年七月二十三日
昭和五十五年三月十五日
第三種郵便物認可
発行(毎月一回・十五日発行)

(通第三六九号)

慈光

第三十二卷 第三号

次

目

他	力	の	悲	願	……	近角常観	……	(2)
信	を	行	く	旅	人	抄	……	(5)
御	一	代	記	聞	書	抄	(続七)	(9)
自	照	日	誌	抄	(18)	……	西元宗助	(12)
一	道	会	の	記	……	榊原徳草	……	(14)
念	仏	詩	抄	……	……	木村無相	……	(18)
信	国	淳	師	を	悼	む	……	(21)
						花田正夫	……	(21)

ひとへに仏の御力にてたすけ給わるなれば、たとい歡喜の心おこればとて、これにて参らるると思ふべからず。よろこびのなければとて、これにて参られまじと氣づかうべからず。ただ思い出すときは、いつにても今の心のなりにて助け給うとは、ありがたやと思ひて称名相續するばかりなり。これにて往生ちがうことあらば、仏は衆生より先きに地獄へ行くべしと約束し給いしうへは、さらに氣づかいあるべからず。

ただこのあさましきまを落さぬとある仰せをたよりとして外は、何事も考ふるにおよばず。ありがたき心は起らずとも、ただ御礼の称名わすることなけれ。不定の境に候えば誰が先だち申すべくとも、一日も油断ならず、必ず必ず御慈悲を忘るまじく候

わが心をいろいろ案じ候えはむやむやと分らぬようになることなれば、それをば唯まよと打捨てて、このまま、御助けを仰ぐべし。それにて御助けに間違いなきものなり。

他力の悲願

他力の悲願のやるせなき親心は、我等が罪惡深重の心をみそなわして、益々大慈大悲の涙をそそぎたまうのである。この涙つもりて五劫思惟の本願となり、この血こりて兆載永劫の修行となりたまうたのである。五劫思惟の本願は罪業深重の我等を飽まで救わんととの親心である。兆載永劫の修行とは虚仮不実の我等を見捨てられない清淨真実の御念力である。

ああ我等この親心を聞き、この念力にあいたてまつる、いかでか信心歡喜せざるべき、いかでか漸愧懺悔せざるべき。

如来の作願をたすぬれば苦惱の有情をすてずして廻向を首としたまいて、大悲心をば成就せり

われらが苦惱をみそなわして、悲憫したまう大悲心、即ちこれ如来の本願力の廻向である。しかもその苦惱の極みを見尽して、飽までこれを満足せしめんとて、大慈大悲の本願を成就したまうたのが如来である。我等が罪のあるだ

往生浄土の、のぞみなきにはあらねども、常に世にまつわりて道心おこらず、あさましく明し暮すにつけて、ときどき往生を思い出し、このありさまにては御助けもあるまじきことならんと氣遣うは、あやまりなり。かかる懈怠のをも救い給う大願強力、ありがたきを喜ぶべし。

またわがころをいろいろと案じまわして、これにてよきか、あしきかと計らい居れば、わやわやして何ともわからずなりゆくものなり。これみな願力の御手強き手元を、外にとりのけて、いらぬ心配をなすなり。

いつにても未来のこと思い出し候うときは、何事も引受けたすけんとなる御呼声を仰ぎ、称名相續するのみなり。

そればかりにて、いつ恐ろしき病にとりあい、称えず念せずして、苦しきまま命おわり候とも、蓮台にて眼をさませ給うこと、一念発起、平生業成とは仰せられたるなり。

近角常観

け、それだけ可愛想に思召すのである。その罪がやめられねのが如何にもあわれで仕方がないのである。しかも私が疑えば疑うほど可愛想と思召すのである。私が如何ほど疑うてもその疑う者を疑わず、へだてる者をへだてず、我等の罪業の重いのをおもしと思召されずして、願力無窮の御慈悲の塊りが無限大悲の親心である。

そもそも信仰に積極・消極の両方面があることを忘れてはならぬ。しかも積極は消極を満たすための積極にして、消極にこれに応ずるだけの積極のあることを忘れてはならぬ。無限大悲の如来は偶然に現われたまうたのではない、我等の罪の無辺なるを救うがために大悲が無限である、否無限ならざるを得ぬ。

聖人の常の仰せに、弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり、さればそくばくの業をもちける身にてありけるをたすけんとおぼしめした

ちける本願のかたじけなきよ、とある。我等の罪業深重が見捨てられぬ御苦勞が、五劫思惟、永劫修行である。かくの如く如来の超世無上の大積極の本願は、つまり無辺、極濁の罪業の大消極の我等があるからである。いな地獄一定のわれ等を見るに見かねて、現われたまいし大慈大悲の親様である。仏かねてしろしめして、煩惱具足の凡夫と仰せられたることなれば、他力の悲願はかくの如きの我等がためなりけり。よくもよくもこの罪惡の底をも見抜きたまいて飽までも見捨てたまわぬおところが、かくまでとは思わなんだ。唯不思議と信じたてまつるより外はない、これ実に我等が罪業深重の大消極あるがために、これを憐愍したまいて不可称不可説不可思議の如来が現われて下さったのである。

人生は無常である、世間は虚仮である、人は頼みにならぬ、我等の力は役に立たぬ、罪業はいかにも深重である、この様に一つとしてたよるべきものはない、仏教の一面はたしかに消極である、しかしこの大消極を救うべき大積極の光明をいただかねばならぬ。弥陀の光明は無明の闇を照したまうのである、我等の罪惡を悲憫したまうのである、無常の人生のために如来常住にして変易あることのない仏陀が現われたまうたのである。しかもその法身の境界より光を放ち、御名を示して、我等を救うための御身を示したまうのである。

聖道権化の方便に 衆生ひさしくとどまりて

諸有に流転の身とぞなる 悲願の乗帰命せよ

実に他力の悲願はかくの如きのわれらがためなりけり、若し悲願の乗なりせば、罪惡の我等、虚妄の世界いかに心を安んずべき、如来は我等を喚びたまわく、

「汝一心正念にして直に來れ、我能く汝を護らん、すべて水火の二河に墜せんことを畏れざれ」と。

ああ人生この「汝」の御声なかりせば天に哭し、地に泣くも何の効かあらん。しかも直に來れとのたまう、何ぞ躊躇すべき、何ぞためらうべき、大悲は待ちかねたまう。万行諸善の迂廻の道を通るべきではない、大悲を聞く一念に直に仰ぎ奉る。我等の罪業、我等の苦惱をみそなわして、能く救い、能く護らんとしたまう、能の一字は大悲の御力なり「阿弥陀如来の仰せられるようは、末代の凡夫、罪業のわれらたらんもの、罪は如何ほど深くとも、我を一心にたのまん衆生をば必ず救うべし」とのたまう。この大能力、この大願業力は如何なる我等の罪惡をも見捨てず、如何なる苦惱をも安樂ならしめ、如何なる障害をも融かしたまう大慈大悲である。

本願円頓一乗は 逆惡攝すと信知して

煩惱菩提体無二と すみやかにとくさとらしむ

ああ我等は逆惡の徒である。弥陀の五劫思惟の願は、そ

それ故に如来のお目当は罪惡の衆生である。衆生を救わずんば仏とは名告るまじという大誓願である。苦惱の衆生を救うための大慈悲である。生死の海を超絶せしめて、涅槃の彼岸に到らしめたまうのである。三界二十五有の苦痛を解脱せしめんがために、常樂の淨土を莊嚴したまうのである。生死煩惱の人生を救うがために蘭林遊戲の還相廻向の御力があるのである。

そもそも人生は苦空無常無我の大消極である故に、涅槃の常樂我淨を得させんとて、如来大悲の本願を起して、尽十方無碍光を成就したまいたのである。ああ人間は虚仮不实であり、三界は虚妄である。さればこそ悲願の一乗があらわれて下されたのである。

しかるに自力作善をもて進まんとするは、つまりこの慈悲を空しくするのである、無駄にするのである、たとい仏を念じ、これを頼みにするも、なをわが方より仏に向う態度ならば自力廻向である。いわんや万行諸善はこの大慈悲をこうむらずして、自己の力を頼みとする小善根小福德の因縁である。

念仏成仏これ真宗 万行諸善これ仮門

権実真仮をわかずして 自然の淨土をえぞしらぬ

くばくの罪惡の私一人のためである。思えばく、人生の罪惡は皆私一人に具足してある、嗚呼、円融至徳の嘉号は、この私一人のための御廻向である。南無阿弥陀仏。

歌集「青蓮華」抄 白井成允

きはみなきいのちのいづみはかりなき

ひかりのいづみ なむあみだぶつ

いつくしみみちたらひてぞものみなを

とこてらしませす なむあみだぶつ

弥陀仏のもとつ誓ひをわがために
つけたまひにし よきひとたふと

弥陀仏のあほきめぐみを國のうちと
くまなくつげん さらばはらから

信を行く旅人抄

池山榮吉

阿弥陀仏とは

阿弥陀仏は、わしはこうして仏になった。お前達も精出してこうなるがよいと、ただ成仏の範を示すだけの仏ではない。またアメリカあたりで募金の際、所定の半分を募集せよ、あと半分はわしが出してやろう、と約束する金満家のように、こちらの持合わず善根に力を添えようという仏でもない。何から何まで向う持で、迎え取らずにはおかないと、うまずたゆまずこちらに向って下さる仏であります。阿弥陀仏は無力の者にうってつけの仏であります。阿弥陀仏はこの私の仏なのであります。

信の一念

「弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて、往生をばとぐるなりと信じて」とある。この信ずるということ一つが肝腎かなめで、絶対他力、親鸞聖人の宗教はこれ一つに終始する。祖師の信後、紙衣（かみこ）九十年の生活は、ここ一つの味を自らも味い、人にも味わせたいとの精進に

ほかならない。

この信の発生の瞬間は「念仏まうさんと思いたつころのおこるとき」で、これがすなわち信の一念、聖人の仰言る「信樂開発の時尅の極捉」であります。

私は更めて言うまでもない、仏教的学問にかけては、いろはのいの字も知らない者であります。それなのに、厚かましくも、こんな席で、歎異抄の話をするのは、私には、これが信の一念であったか、時尅の極捉とはここを云われたのかという、いはばやややそれらしい体験がありますので、それ一つを種として、うちにたたえる感想をありのままに申し述べるだけのことであります。

ところがそれがなかなか云えないのです。というのも、人の感じを現すには、言葉はあまりに不完全であるばかりでなく、心の経過そのものも、一々はつきりと意識にのぼるとは限らないのです。まして非常にこみいった宗教的感じを言いあらわそうとすればまことに至難であります。

入信の資料

「信仰はなかなか得られるものではない。何か問題がおきて煩悶にでもおちいるといいだろうが」とよく人が云います。が、私に言わせれば、人には何時でも信仰に入れる。それに必要な材料を現在持合せていない人は一人もないので、それなのに信を求めようとしないのは、つまり自分の本当の姿がまだ気づかずにいるからです。それが知れて来さえすれば、信仰はいやでも応でも求めずには居られなくなり、そのあげくきつと与えられるのです。

が、自分のありさまを如実に知るといふことは、非常にむづかしい、私達は外に他を見るにさといだけ、内に自己を見るのがうといのが常であります。

自知の早道

ところで、自分を知る道を、てつとり早く知る方法を申上げよう。それは心の日記を書くのです。それは単に外的事件を誌すのではなく、朝起きてから夜ねるときまで、次第によつては夢にみた事柄でも、一日中に自分の心の歩いた道行きを書いてみるのです。自分はこういうことを望んだか、どういう感じを抱いたか、その動機は何かという風に、それからそれと勇敢に、素直に、つつこんで行くのです。その中には随分人に云えないようなこともあるでしょうから、人に見られぬ密室で誌すことを条件としてもよい、

また外見を防ぐために、書き終つたら破るなり、焼却してもいいのです。

猛獸狩りにわざわざインドやアフリカまで出かける人がありますが、心の日記をつけてさえゆけば、珍奇な、怪物に出遭うこと疑いなしです。狐狸や豺狼などはありふれています、種々の怪獸が、百鬼夜行のものすこいとところが続々と現れます。とても見るに堪えないものがあります。私達が子供の頃見た絵本に、髪をふりみだし、血にまみれて蒼い顔に目を据え歯をくいしばっている幽霊も日記の中に出てくるでしょう。

汝自身を知れとは、昔からの格言です。ニイチエが、心を蠟（かき）にたとえました。中身がドロリとし気味わるく、ヌラリヌラリとして掴みにくいからであります。このわが心の中身の気味わるさに、おぞけをふるった人でなければ、まじめに信仰を求める心も起るはずがありません。ところが、自分を反省する時、目をさきに向けて、比較的立派な自己が現れ、ややもすると自分にだまされることとがあります。即ち、将来どんな目的を持つか、それを達成する手段にどんな方法と覚悟を持つかと、前途を眺めると、そこにはかなり賢善精神な自分がうつります。それは現実の世界でなく、憧憬の世界で、それは現実とは非常に相違しています。西洋の諺に「地獄への道は善い目的で敷

きつめられている」とあるのも、理想通りにいかないのを云つたのでありましょう。

だから、自分を知るには、目を後に向けて過去の所作をかえりみた方が確かです。瞑目一番、自分は果してどの程度に自制的であるか、また利他的にはどうか。また自分の人格を尊重し、他人のそれを尊重するかと、沈潜してみると、自己の本当の価値もかなりの確に割出されます。こうして出た自己の価値のすくないのに驚かないでしょうか。もしあるとすると、その人はどうかしているのです。

人の心は幾重にも包まれた謎です。うわべからでは中何がいっているかわかりかねます。上の包みは立派でも一枚一枚はがしていくと、だんだんおそまつな、いかかわしいものが出てきます。それから推しはかつてみても、中味は大したものには違いありません。道徳家がそれを見たら大変です。立つ瀬がありません。

だから道徳家はあまり深く自己を洞見しようとしません。これは手にあまるなと思われものが出来来そうになると、忽ち眼を閉じてしまいます。そうしないと自己が保存出来ないからです。

信仰に徹した人の特長

道徳家が自己洞見につたないに反し、絶対他力の信仰に徹した人はそれに堪能なところがあります。そこを端的に

蛇蝎奸詐のころにて 自力修善はかなうまじ

如来の廻向をたのまでは無慚無愧にてはてぞせん

善導大師は、一方に、大悲の願船に乗じて、光明の広海に浮びぬる身の仕合せをよるこぼれながら、他方に、しみじみと、蛇蝎もただならぬわが心根をなげかれました。「わが身は現にこれ罪悪生死の凡夫、曠劫よりこのかた、つねにしみつねに流転して、しばらくも出離の縁あることなし」とある。

聖人の常の仰せ

親鸞聖人もまたこれと同様なところから「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり。さればそくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ」と常に仰せられました。この仰せこそ、絶対他力の信仰の契機を的確に、而も周到に、完全に網羅し、余韻のふくんだ文はまたとないと思われます。聖人が、よき人、法然上人の仰せを聞いて、本願に帰せられた利那、肝に銘じたそのままの披瀝とうかがわれるのであります。

「ひとへに親鸞聖人がためなりけり」罪悪深重、煩惱熾盛の、この私をたすけるための本願でましましたといただかれたのであります。こうあってこそ、与える方と、受ける方の意気がしっくり合って、ここに救済の大事が完成され

云えば、もともと絶対他力に帰したのも、自分で自分の始末がつかなくなつたのが原因でした。弥陀仏は、私が悪くはないかぬ、心が醜くては救わぬとは云われません。よく弥陀仏であるから、その心光に攝取されるのは、ありのままの私であります。私自身に気づかぬところまで見通された弥陀仏に対しては、先方のへだてのない気安さから、遠慮も気がねもいらず、自分の全体を知らせて貰えるのです。それが深まればふかまるほど慚愧せずにはいられなくなり、同時に、かねてここをしろしめての大慈悲を感謝せずにはいられないのであります。

絶対他力の鏡

自己の赤裸々な姿は、絶対他力の鏡でないと十分にそれが現われません。鏡の中にどんなあさましい姿がうつつても、それをみ心におさめまもつて下さる力がありますから、すこしもためらう必要はいりません。所謂「善もほしからず、悪もおそれなし、本願をさまたぐる。程の悪なきがゆえに」の信仰的勇氣にもとづいて、はじめて自己の真相を正視出来るのです。

親鸞聖人の御晩年の、愚禿悲歎述懐和讃に

小慈小悲もなき身にて 有情利益はおもうまじ

如来の願船いまさずば 苦海をいかでわたるべき

ます。

私共も幸にこの御文をよましていたいて、内なる思いを存分に、のこりなく言い表わさせて頂く感があります。

さて、この常の仰せが、聖人の主観の見地からの御述懐であるならば、歎異抄の第一章は、客観の立場からの釈明であります。いはば真宗の教理であり定義であります。

しかしそれかといって聖人が理論的研究によって案出されたものではない。聖人の実感を云い表わされるにあつて「私が」というところを「人が」と置き換えられただけで、どこまでも聖人の体験にもとづいているのであります。要するに、見かた、言葉のたてかたこそちがえ、ものそれ自身は一つなのです。

以上の御文を読みながら、その一言一句がわが心にしみわたり、或は、内から湧き出るかの感を抱くかたは、信を聖人と一つにする幸せな方であります。どうぞ皆さんのそのうあることを、或は一日も早くそうなられることを、切に希望する次第であります。

御一代記聞書抄（続七）

井上 善右衛門

法敬坊に或人不審申され候。これ程仏法に御心をも入られ候ふ法敬坊の尼公の不信なる。いかがの義に候ふ由申され候へば、法敬坊申され候。不審さる事なれども、これほど朝夕御文を読み候ふに驚き申さぬ心中が、何か法敬が申分にて聞き入れ候ふべき、と申され候ふと云々（第二一七条）

ある人が法敬坊に向つて、あなたのような篤信な仏法者のお側にいる尼公が不信心なのは不審のいたりです。どういふわけでしょうか。と尋ねたというのです。尼公というのは法敬坊順誓の実母か姑か妻か、いずれかの尼になつた人を指すといわれていますが、どうも法敬その人の答え振りからすると、彼の妻女であるように思われます。皮肉といえは皮肉ですが、こうした悲しい出来事は昔も今も同じくあることです。これを外側から見ると、どうも不審である。ことに現代のように環境論が人間を見る視点となつて

いる考えからは、解し難い事柄でありましょう。それに対して法敬坊が「これほど朝夕御文を読み候ふに驚き申さぬ心中が」と述べています。ここに「驚き」という言葉が出ていますが、これは真実の宗教への道において、重大な意味をもつ事柄であり、十分に省み味うべき問題であると思ひます。

先ず驚きには二種の別があります。一つは本能的な驚きで、例えば突然地震が起きると、驚き慌てるような場合です。それは身の危険を感じるからです。ところがさらに別の驚きがあります。それは直接身の安危にかかわりなく起る精神的な驚きです。それは感ずべきことを今まで感せずいた心が、ある事に触れ気づかされたときの感動ともいふべきもので、心の大地が大きく揺振られて精神に新しい転換がもたらされようとするときの心情です。

二

我々は死を忘れて生きていくことが多いのです。自分の命が一定の間保証されているかのようによい安易な生の觀念に住していることが多いのですが、しかしそこから夢の生がこの身をつつむこととなります。夢に生きていくとき、それを夢だと思いません。しかし不実な夢はいつかは揺るがざるを得ません。それは真実の生が、夢みる生に喚びかけて来る出来事とも言えましよう。

若き日の悉達多太子は、ある春のこと、父王に伴われて耕田の式に列しられました。耕する農夫を見ておられると、ふと犁の端に堀りかえされた虫を、どこからともなく飛んで来た一羽の鳥が、たちまち啄み喰うて舞上るのを見られ「あわれ生きものは互に喰ひ合うよ」と胸痛み驚かれ、ひそかに列を去つて林に入り深い想いに沈まれたといひます。

また長じて季節それぞれの宮殿に榮華を楽しんでおられた頃、ふと自分は老いる身でありながら、老人を嫌悪し、自から病む身でありながら病人を厭い避け、死する身でありながら死を忌み恐れている。これは矛盾ではなからうかと思われたとき、その驚きに、青春の誇りはたちまち消え去つたといわれます。これが四門出遊の物語となり釈尊出家の動機として伝えられたのでありましよう。

夢幻の生が破られ、真実の生へ転せしめるものは、生命の底に起る驚きであります。この驚きの心情が如何に大切な働きを果すかを思わねばなりません。知識は驚きではありませぬ。驚きこそ今まで聞かれなかつた世界へその人を入らしめるものです。ここにおいて本当の歩みが始まります。

清沢満之師は「宗教は自己を問い直すことから始まる」と言われましたが、真に自己を問い直すとき、私どもは驚かざるをえません。それは今まで隠されていた問題が心の奥から掘り起されるからであります。またふと驚くということも、無意識に自己が問い直されているからでありましよう。

聞法ということはこのような道に、私の心を育て養ひ促しすすめて下さるのです。驚くべきことに驚く心の用意が培われるのです。第二二三条に「一度び仏法をたしなみ候ふ人は、おほやうなれども驚き易きなり」といわれているのはその事であります。夢が破られる驚きと共に、そこに現われ出て下さる弥陀の本願の広大無辺なることもまた驚きであります。本願に遇つて感動なきを得ましようか。

こうした驚きの呼びかけを随処に身にうけながら、なほ堅く迷夢の殻に閉じ込めて、脱出の機を失うているのは歎わしい事といわねばなりません。その悲心が第一七四条には「おどろかす甲斐こそなけれ村雀、耳馳れぬれは鳴子にぞ乗る」という歌を引かれて「ただ人は皆な耳馳れ雀なり」と歎じておられるところががわれます。正信偈に「難中至難無過之」と述べておられるのも、このところでありましょう。

しかし我々が仏法に遇うて心開かれるということは、不思議の縁に催されておこるといふ外ありません。祖聖はこれを「遣く宿縁を慶べ」とまうされました。そこには後天的な環境だけではどうしても割切ることの出来ぬものがあります。法敬坊のような篤信の人の傍に生活しているならば、その感化によって必ず仏法に志しをもち、信心の人となるはずであると考えるのは、人間の合理的な思考というものです。

勿論それが大きな縁の一つとなつて働くことはいうまでもありませんが、ただそれだけで必然的に結果が生れるとはいえません。縁は人間の現実というものです。では捨てて顧みずとも同じかといえ、これまた真実を心得ぬ人の

思いです。歎異抄の「いづれもいづれもこの順次生に仏になりてたすけ候ふべきなり」といふおこころを思わねばなりません。

いま法敬坊に、あなたの尼公はどうして不信心なのかと問うた人に対して、「朝夕お文を読み候ふに驚き申さぬ心中が、何か法敬が申す分にて聞入れ候ふべき」と答えられたのは味あうべき言葉です。

尼公に愛想をつかし断念されたのはかりません。仏縁の深さを思うと共に、やるせなく切ない心がそこに動いていることを深く感じるのであります。

(昭和五五、二月八日)

梅

山村暮鳥

おい、そつと

そつと

しずかに

梅の匂いだ

自照日誌抄(18)

——蓮の花びら——

一月十日(木)ご本山(本派)の報恩講にお参りさせていただく。勿体なくも御招待なので、あつかましくも正玄関から入る。そして特別席に案内されましたが、こればかりは辞退して、御影堂の大衆席に参りますと、既に満堂に近い地方からの参詣者。ところで、ほの暗いので隣り周辺は、どなたがお座りが、よくわかりませんでした。ご挨拶なさろうとするので判りました。なんと、わが明光寺(浅田純雄住職)のご門徒。坊守さんも仏壇の会長さんたちも一緒に、つつしまやかに小声で新年のご挨拶をかわす、嬉しいことでありました。

午前十時になると、さすがは御正忌、ご本堂いっぱいとなる。気をつけてみると、ご婦人の多くは紋付き羽織。やがて御門主がしずしずと所定の場所に御着座されると、いよいよ勤行がはじまる。わたしは久々に寂かな気持ちになつて念仏し合掌し奉ることでありました。

西元宗助

頑張るーがんばるーという言葉。さいきんよく用いられます。女の子まで、頑張るといふ。しかし、どうも気になる言葉なので、ある日、新村博士の「広辞苑」を引いてみますと、「我に張るの転、①我意を張り通す、②どこまでも忍耐してつとめる」とあるのを見て、ハツとがっ点がついた次第であります。

なるほど忍耐してつとめるという意味もあるのですが、しかし我意を張り通す語義もある。そしてこの語感が、この言葉の業、いやわれらの業なんだナと考えさせられたことでありました。

○ ○
年の暮に探究社での花岡大学先生の書展を、新春には大阪での小坂奇石先生ら現代一流書家の書道展を參觀して、自分の字の情気ないことを、痛いほどに知らされました。それで、ことしは一念発起して、書の稽古をするぞと、書道展の帰途、家人に前宣伝して喜ばせたのですが、しかし

おかしなことに、いよいよ自分の情気ない字が、いじらしく可哀相で、この拙い字を、どこまでも大事にしてやるぞ、いや、そのためにも、誰か然るべき先生につかねばならぬと思うことであります。

○ まったく妙な因縁で、今から十三年前に亡くなられた京都山科の勧修寺・仏光寺の大石順教尼（八十一才没）——この両手のない尼さまが、筆を口にして書かれた般若心経一巻を拝見して、ほんとうに驚きました。美しく神々しいのです。

順教尼は、妻吉といった十九才のとき、大阪・堀江の六人殺しの生き残り、両手なしの娘芸人として三遊亭金馬一座の巡業に、加わるのです。そして巡業先きの仙台の旅館で、籠の中のカナリヤが、雛を羽根の下に抱いて、口で餌をついばんで雛に喰べさせているのを見て、ハッと電気にふれたように感動したというのです。

そうだ、手がなくても口で字が書ける。絵もかける。情気ない見世物娘から抜けだして、自立の道を歩みたいと、これが順教尼の一念発起であったというのです。なお順教尼には次の歌がございます。（詳しくは春秋社刊、大石順教著「無手の法悦」八五〇頁）

一道会の記

次に花田先生のお話は、次の通りでありました。

最近、私の胸に去来するのは、聖人の常の仰せであります。すべて、何か一道に達した人、真実の教を身につけた方は、同じことをいつもくり返えされる傾向があります。禅宗では、俱胝和尚の一指頭の禅があります。どんな問いにも、指一本を立てて、それ以外には何も説かれなかつたが、それで不思議に問う人も満足して帰ったそうであります。弟子が和尚のお留守の時に、その真似をして人に答えていることを知られた和尚は、その弟子を呼び、問題を提唱されると、弟子は指一本を立てたので、すかさず和尚はその指を切りつけられると、弟子は驚いて逃げ出した。和尚はこの弟子を呼びとめ、指一本をたてられると、それではじめ弟子はさとしたとあります。而も和尚の死ぬ前に、この指は一生使ってきたが、遂に使いつくせなかつた、と述懐された由であります。

くちに筆とりて書けよと教えたる

○ 鳥こそ われの師にてありけれ

榎本栄一翁、いよいよ店仕舞いかと。その栄一翁にお見舞状をさしあげましたら、俗事はなにも書いてなく、左の一枚の便箋が、それこそ、蓮の花びらのように入っていました。

蓮の花びらが

天からハラハラと

ふつてまいりました

もったいなや

お釈迦さまのお手からのようでございます。

ありがとうございます

ありがとうございます

榎原徳草

さて、何時でも、何処でも、誰にでも同じことをくりかえされるのは、普遍にして妥当な真実なものを身につけておられるからであります。聖徳太子の常の仰せは「世間虚仮、唯仏是真」でありました。太子は、仏語を「先聖後賢、是非すべからず、故に常という」と讃仰していられますが、太子御自身の仰せもまた不滅の金言であります。

聖人の常の仰せは歎異抄に「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずればひとえに親鸞一人がためなりけり。さればそくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ」であります。そのほかに報恩講式文に「つねに門徒に語って曰わく、信謗共に因となつて同じく往生浄土の縁を成ず」とあり、改邪抄に「我はこれ賀古の教信沙弥の定なり」と常の御持言があったとあります。住田智見講師は、この三つの仰せに従えば、真宗信者として十分であると云っておられました。

今日は歎異抄からいただきました。

さて「ひとえに親鸞一人がためなりけり」とありますについて、如来は十方衆生を救うとあるのに、どうして一人がためと仰ったのだろうかと不審に思いました。池山先生におたづねしましたら、「久遠このかた子ゆえの廻向、わたし一人をかたおもい」のお歌を示されました。「実は敏郎が病気で大手術をした時、病床についていたが、内心自分は呑気な父さんで、親の資格があるだろうかとあやぶんでいた。ところが、病人が水を、と云う前にチャンと水を用意して居るのに驚いた。そこで始めて、親と子は二にして一、一にして二だな、と知らされた。しかもこの心は、他の子供に対しても同様で、一人一人がかけがえのない。その結果、子供はみんな可愛いと云えるので十把ひとからげではない。如来も、一人一人にかけがえは下さるので、それで自然に一切衆生と仰るので、一人一人が直結されている。その如来のお心を聖人は一人がためと信受されたので、それは夏は暑い、冬は寒いというのと同じ、自然のお味いである」と聞かされて大いに納得いたしました。

しかし、私に子供がないので、親としての心は直きに感じられませんでした。フト、自分に子はないが親がある、しかも五人兄弟であるが、私が親に向う時、私一人の親で、

さるのも、私共が、黒色・黄色・白色ということ人で人種差別をして争っているから、万人を最も尊い真金色にしようとの悲願からであります。

他心知通の願を起されたもの、私自身父を亡くしながら、自分のことはかり考えて、沢山の子を残して死んで行つた父の心はちつとも察していなかったと今頃になって反省させられております。夫婦であつても家内の身にはなれないにつけ、他人の心がわかるようにしてやりたいと願つて下さるのだなど知らされますことです。

次に、大悲の本とまで仰る、光明無量、寿命無量ならんとお誓いは、私は何処でも失敗をくりかえしているから、眼がはなされぬ、何処で何をしていようとも見護つていゝぞのお誓いであり、また、何時まで経つても真実のさとりが得られず、一人立ちが出来ぬ身を憐まれて、何時までも手を執り続けてやらねばならぬのお誓いでありました。親戚に幼い時脳膜炎をして、成人になつても精薄のままの者が居りますが、その親は、この子を残しては死んでも死にきれないと云いながら亡くなりました。それを聞くにつけてもこの悲願が心にしみるのであります。

王本願といわれる十八願では、至心・信樂・欲生をお誓い下さるにつけ、我身の虚仮不実の身、法爾として信樂の心のない身、浄土に急ぎまいりたい心のおこらぬ者なれば

五分の一の親とは思えぬことに気づき、この様に自然になつたのは、私をかけがえのないものとして、昼夜に護念して貰つたおかげであつたと気がつき、大いにうなづかされました。

最近に「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば」とありますことに括目させられておるのであります。法然上人の御伝記をいただきますと、上人が「五劫思惟」というところでは、いつも落涙せられたとあります。これを親鸞聖人は親しく聞いていられたので、恐らく聖人も熱い心で常に仰つたものと思ひます。そこに見えてきたものは「さればそくばくの業を持ちける身にてありけるを」とありますように、仏の御目にうつる御自身の罪業の姿でありました。

さて四十八願の第一に、三惡道なき国を願われていますのは、私自身が朝から晩まで貪・瞋・痴の煩惱をまきちらして、あと始末も出来ずにすごしているのをみそなわされて地獄・餓鬼・畜生なき国を建立されたのであります。親は子に無くてはならぬことのために苦勞しますように、私は私に無くてはならぬことを成し遂げて下さるのです。

更に、浄土に生れた者は悉く真金色にしようとお誓い下

こそと渴仰申すこととあります。

また二十二の還相廻向の願を拝して、ことに老と病の苦を持ちます身には、この願ましますことによつて、離合を因縁にまかせることも出来、これがないと死ぬに死ねないで悶死せねばなりません。また先きだつた有縁の人々にもこの願あつて、やがて浄土で会することも出来るのであります。

このように本願のおぼしめしを仰ぐ時、そこに仏の御眼にうつる私の姿が照し出されるのであります。ソクラテスの昔から「汝自身を知れ」と云い古るされ、この大切さは万人よく知つておりまして、自分の眼で自分の顔が見えぬように、身勝手に、煩惱に曇つた心では正しい自分は見えます。孔子は「十指のゆびさすところ」を大切にせよと云つていますが、それも人間の眼は不完全で正しいものとは云えますまい。ここに単刀直入に申し上げますと、本願の思召しをよくよくいただくところに、光が入つて自身の愚悪さも照し出されてくるのであります。子を知るは親にしかずとも申しますが、今一歩進めて、自分を知るは仏にしかずと申せましょう。

このようにして自分の實際の姿が見えてはじめて私共の行くべき道も定まるのであります。遠い荒海は泳いで渡れ

ません、そこに丈夫な船があれば、親子手をとって向うの岸に渡ることも出来ず。法然上人が生涯、十悪愚痴の法然といわれ、親鸞聖人は、虚仮不実の愚禿といつも仰つて、かかる浅ましき身は如来の願船に乗り、選択の本願の名号をいただくばかりと、わが身にかけてお導き下さるのであります。

次に、「親鸞一人がため」と仰る聖人の心には、一切人がおさまっているのであります。と申しますのも、「さるべき業縁の催せばいかなる振舞もすべて」とあるお言葉をおし、聖人は、人々の持つ業報、善悪、淨穢の別なく、そこに御自身を見出していられ、万人と同座してくださるのであります。だから、その中の一人でもお救いからられる人があれば、聖人御自身も救われないのであります。

本典の総序に、王金城の悲劇をあげられ「これひとしく権化の仁、苦惱の群萌をすくい、世雄の悲、まさしく逆謗闡提を恵まんと欲してなり」と結んでいられるのも、そこに出てくるダイバも、アジャセも、イダイケ夫人も、そのままに苦惱の身をすくいとげて下さるうために現れて下さったよき人々であるとうけとっていられるのであります。

終りに、この聖人の常の仰せを唯円大徳は、善導大師の

念仏詩抄

まるきり用が無いのが

香師おおせに

“信じぶり称えぶりの”

自力の料簡（りようけん）を

先きに立てるゆえ

大切なるご廻向の

ナムアマミダブツが

かたわになる——”

信じぶり称えぶりに

まるきり用がないのが

ご廻向のナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

機の深信「自身は罪惡生死の凡夫、曠劫よりこのかた常に没し常に流転して、出離の縁あることなき身と知れ」とすこしも違っていないと讃え、そこに時代をこえ、国境をこえてかわらぬ、真実不滅のまことを仰いでおります。世間のことは、新しいものを追求しながら、いつも陳腐してしまふのに、いつまで経っても、何処へ行つても、古くならない新しさを見出しているのであります。

さらに、唯円大徳は私共が自己を棚にあげて、よいのわりのとばかり云つて、如来の御恩の深重なことを知らずに迷い続けているのを悲憫されて、聖人がくりかえし、まきかえし、常に仰せられたのでありますと、なみなみならぬ聖人の洪思を仰いでおります。

近角常音先生のお歌に

このこころ これを阿闍世とのたまいて

見捨てじと云うみ慈悲なりしか

よしあしは 人にはあらん大悪の

とありますもの、私の忘れ得ないのもであります。

（註）私の話があまりにゴタゴタしてしまいましたので、榊原師の御筆録をもとに、書きなおしました。当日お出席の方には奇異に思われましようが、御海容たまわりますように（花田記）

木村無相

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

仏願にしたがう

香師おおせに

“善知識のおおせに

したがうが

仏願にしたがうの

なり——”

聖人のおおせに

“よき人のおおせを

こうむりて

信ずるほかに

別の子細なきなり”

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

ホンニ願うてみぬ者には

香師おおせに

後生願う心は

ホンニ願うてみぬ者には
後生の助からぬ味わいが
知れず

また

ウタガイのはれかねるワケも
わからぬなり”

ホンニ願うてみぬ者には
ホンニ願うてみぬ者には

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

それゆえにか御和讃に

香師おおせに

忘れまいと思うても

忘るるものは

如来の御恩と

お念仏なり——”

それゆえにか

聖人ご和讃に

弥陀大悲の誓願を

深く信ぜん人はみな

ねてもさめてもへだてなく

ナムアミダブツを称うべし”

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

受けてゆくのじや

香師おおせに

心にかなわぬことは

みな

宿業のなしわざ——

かりそめに人に

そしらるるまでが

過去の業報が

あらわれてくるのじや”

受けてゆくのじや

受けてゆくのじや

ナムアミダブツと

受けてゆくのじや

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

みなお慈悲なり

香師おおせに

助かりたいと思ふ心が

助けてやるぞのお慈悲より

もようさるるなり——”

助かりたいも

信心も

念仏も

衆生も

みな

助けてやるぞの

お慈悲より

もようさるる——”

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

信国淳師を悼む

花田正夫

信国先生は、昨年の夏肋膜炎で倒れ、約四ヶ月間、郷里で養生され、秋には学院に帰り、三学期に入ってから再び講義を続けていられたが、一月二十八日の午前中歎異抄講義において「寿命」について力をこめて語られたその夕方、心筋梗塞症のため倒れ、一時は危篤状態でしたが不思議に回復の兆を見せられたが、しかしそれも束の間、二月五日午前零時七分に、念仏の息たえおわれました。昨年倒れたから後、しきりに、祖聖の

我なくは法は尽きまじ和歌の浦

あをくさびとのあらんかぎりは

のお歌に呼応されて

われら一向に念仏申して、仏天の下、

「青草」びととなりて、祖聖に続かむ

というお言葉をくりかえして申されました。そこに先生はいのちそのものを託しておられたと、学院の方々が追慕していられます。

さて、信国先生は、京都の三高を卒えて、東大仏文科に入つて、「師を求め」心がよいよ切でありましたが、それも果たされず、大谷大学の教授になられた。

その四月、歓迎会が催された時、丁度、甲南高校から招かれて大谷大学の教授になられた池山栄吉先生にめぐり会われたのであった。このことを次のように述べていられる『何かにつけ、自分が自分で持ちきれず、自分自身が自分にとって不安であり、ややもすると自分と自分自身の間に、ずれが生じるので、始終自分自身の前で浮き足立った恰好で生きるよりなかつたその頃に——私にもなおいくらかの青春の残っていたその頃に、ウドンゲの喩えてたとえてよというような、稀有な生きた「念仏の人」に会い、その「人」を間近かに見、その「人」の語ることばを初めて聞いた。その「人」に出会ってみて、私の求めていた「人」が、ついに「この人」だったと初めて確認できた。

私は家に帰って、昂奮して、妻にしやべり散らした。

私は浄土に往く、浄土が何処かにあつて往くというのではない。浄土を思想的に考えたり、観照的に捉えたりしてそこへ往くというのでも毛頭ない。私が浄土へ往くという理由は簡単だ。私は今夜、念仏して浄土に往く人を見てきたんだ、ただそれだけ。それでも充分。私はこの人を信じる。だから、私も浄土に往く、ということなんだ。さあ、君はどうするか？ 君も私と一緒に往くか、どうするか？

しかし、それは君自身の決定すべき問題だ。とにかく私は浄土に往く!!

多少狂気じみた私のことばも、今改めて考えてみると、その時の私の上に乗った、一つの「新しい生」の胎動というか、つまり私には、私自身を超えて生きるいのちの道というものが、自発的に、開けばしめていたように思う』

その後、池山先生が病気で谷大を辞められた昭和十二年に郷里のお寺に帰って、御門徒と念仏の縁を深めていられたが、昭和三十三年に、大谷専修学院の院長として招聘され、爾来二十二年間、学院を続けられたのである。その間先生の教育の根本は

「仏教による人間教育といつても、それには人間が仏教を借りて人間を教育しようとするものと、仏教、すなわち仏の教えそのものが人間を教育する教育と、二つの型がある」

と、区別されて「教師が学生を教育するのでなく、仏の教えそのものが、直接人間を教育するという教育でなければならぬ」と云っていられる。

私はここに、祖聖が「親鸞弟子一人も持たず」「親鸞私なし、如来の教法を我も信じ人にも教えきかしむるのみ」と仰言つたままの信念を大切にまもられているのを知らされるが、同時にまた、学校教育の祖とあがめられるペスタロッチの銅像は、片手で子供を抱き、片手で天を指している。これは、彼の教育は、子供を一番愛される方、神のふところにかえすという精神の象徴であるが、それにも自然に通うものであった。

今回、先生の学院での二十年の間に発表されたものを集録して『いのちは誰のものか—呼応の教育』を東京の柏樹社から出版され、亡くなられる二日前に届けられた由であるが、その中に、I 花の決意、自他、生死、いのちは誰のものか、II 呼応の教育、自己を明らかにする、真実に生きよう、仏の教え子、浄土の大菩提心、III 花咲く生、私のお内仏、来生への開け、光は竟に遠からじ—がおさめられている。私も急いで読ませて貰ったが、そこに微に入り細にわたって、相対分別の世界—対立抗争か妥協的和平のくりかえしの無窮の連続する世界—に絶対真実の

仏のまことのいのちの働きがあらわれて、游泥華の花咲く趣きを鮮かに述べられていることに心うたれた。

このことが、是非・善悪の二元対立に終始する世界に、祖聖のことはばとおして普及することを願っている私には大きなはげましであった。噫、今や先生いまさず、そのおころを体して、いのちの限り歩み続けたいとあらためて願わずには居られないものがある。

数年前、フランスからの留学生が「日本に来て空手を習って大分上達したが、師匠にきくと、この道の極意は勝ち負けを越えるところにあるとのこと、二元対立のことしか知らなかった私は驚異であった。考えて見れば、上手になり強くなっても、病気になるか、老いて行くと、弱くなってしまう、勝ち負けを越える世界を獲てはじめて、病も老も障りとならないことが解った。その時、フランス語訳の歎異抄を読むと、いたるところに、智愚をこえ、善悪をこえ、生死をこえて、それらをおさめた仏の本願を知らされ、そのことをおききたい」とのことであった。

又、岡山大学の山田宰先生が、歎異抄をフランス語に訳された時、あちらのカソリック信者の文学者に読んでもらったら「善人おもて往生をとぐいわんや悪人をや」とか「名残り惜しく思えども娑婆の縁つきて力なくして終る時彼の土へはまいるべきなり」等の箇所はどうしても理解出

棄老国の話

遠い昔、老人を棄てる国があった。時の一人の大臣があり、国法によれば、老いた父を棄てねばならぬのであるが、親を思う心が深く、どうしても棄てるに忍びないで、深く大地を掘って家を作り、そこに忍ばせて孝養をした。

強大な隣国から難題を出し、それが解けぬと攻め滅ぼすと云って来た。第一に、二匹の蛇を出し、雌か雄を云えと云う。誰もそれに答えられないで困った末、大臣は老父に尋ねた。すると「それは易いことだ、軟いものの上にその蛇を置くがよい。さわがしいのは雄、動かないのは雌である」と。これで容易に区別がついた。

第二回は、大白象の重さは何斤かとのことであった。大臣の父が云うのに「その象を舟に乗せ、水際を画いて、次に石をのせ、その水線に及んで、石をはかれ」と。

第三回は、一掬の水が、大海よりも多いというのは、何を云うか、と。大臣の父は答えた「それは清らかな信をもつて、一掬の水を三宝や父母や病人に施せば、その功德は永久に消えない、海水もくらべものにならぬ」と。

第四回は、睡れる者に対しては覚めたといわれ、覚めた者に対しては睡るといわれるは誰を指すか、と。大臣の父

来ぬということであったとお聞きしている。

更に、ロンドン大学の仏教学の教授の稲垣先生の話に、ロンドンで真宗の集いが出来たが、一人の婦人が、念仏申すようになってから、永い間の宗教戦争（新旧両教の抗争）からはじめて解放された喜びの手紙を貰ったとお聞きした。英国の歴史学者のトインビーも、東洋の仏教に和ぎの教えがあると知り、二度も日本に来て教えを求めていた。二元抗争の永い人間歴史を知悉した人としては大きな驚きであった。

以上のように、仏陀の絶対真実のいのちの働きを欧州の人々が聞いて驚きはじめていることを知るにつけ、日本に生れながら、また祖聖のおことばを耳に目にいれながらも耳なれ雀になって、その真実ないのちの働きに盲、啞になつていくことも省みされたことであった。

信国先生が、この不思議な働きを真正面から発表して下さったことは、まことにありがたいことである。お志のある方々の御講読をお勧めしてこの稿を終る。

答えて「それは道を修めている人を指す。一般の凡人にくらべては覚めているが、証りを得た聖者とくらべては睡っているからである」と。

第五回は、真四角な梅檀の木を取り出しどこが先きで、どこが根の方であるか」と、大臣の父云う「それを水中に入れよ、根の方は沈むであろう」と。

最後に、同じ形した二頭の白馬を出し、どれが母であるか子であるかと問う。大臣の父、即座にその子に語る「その馬に食をあたえよ、母は必ず草を推して子にあたえるであらう」と。

国王は大いに喜んで沢山の宝を与え、望むものは何でも与えようと大臣に云った。そこで大臣が云うに「国のおきてによれば老父は養うてはならないのでありますが、私は父を棄てるに忍びないので、ひそかに国法を犯して、地中の家で養うておりました。これまでの応答はみな老父の智慧から出たものであります。老人には体力はおとろえても智慧を持っております。どうか、大王よ、国中に令して老人を養うことを許して下さい」とお願いした。

王は心から悦び、大臣の父を尊んで国師となし、普く国中に令して老人を棄てることをとどめ、孝養を尽くさしめ、もし父母を軽んじ、師長を敬わぬものがあるときは、重い罰を加えるであろうと告知した。

あとがき

暑い寒いも彼岸まで、の好季になりました。各地でお彼岸の法要がいとなまれています。住田智見講師の

連れ多き 浄土の旅や 春の風を思い浮かべ、心あたたまるものがあります。

近角先生の「他力の悲願」は、光のない地上に、唯一無碍の光明ましますことを力をこめてお勧め下さいました。

池山先生の「信を行く旅人」は、仏智の鏡に照らされてこそ、自己の正体もうつし出され、いよいよ本願の深いおほしめしを仰がせていただける点を酷明にお述べ下さったものです。

井上様の稿を読んで、有島武郎が愛児の遺影に「あなとうと、汝がひとみに驚きの、あなとうとしの驚きの色」と書き添えていたのが思出され、とかく耳なれ雀になって、空しく人生をすごす身を省みさせられました。

西元様は、二月十七日朝の教育テレビの宗教の時間に、大西順教尼のことについて感話をのべられました。この稿でも一寸それにふれて下さいました。私は字が下手で、父が「大隈さんも悪筆で、自分の名

だけを書いた。お前も自分の名だけを人の真似の出来ぬようにしろ」と云って、名前書きを手にとつて教えてくれたことも忘れられぬことでした。

一道会の記には、私の拙話を榊原様が腐心して誌して下さいました、御礼申し上げます。

木村様はこの寒さの中を入院すれすれの病状ながら大切にすごしていられます。視力の弱つたので法友からのお手紙に返信が思うにまかせないけれど、いたたく法信は何よりも有難いとのことであります。

信国淳師が二月五日に亡くなられ、十八日には専修学院葬が執行されました。大谷大学で池山先生にめぐり会われたことで生涯の念仏の道が決定され、院長となられて二十年間、特長ある信の歩みを続けられました。謹しんでお別れを悼んでおります。亡くなられる二日前に師の著書（左記）が出版せられました。

いのちは誰のものが 信国 淳著

—— 呼応の教育 ——
定 価 二千五〇〇円 送料二〇〇円
発行所 東京都文京区千駄木二八一三 柏樹社
振 替 東京〇—一三三七二四

△御案内▽

○毎月第一、第三日曜、午後一時半、一道会例会。一道会館の南隣り

南区駈上町二の八六。鬼頭康彦氏宅。

市バス、新郊通り一丁目下車、東入ル三筋目、角

地下鉄、新瑞橋終点下車。

○教西寺、法話会。昭和区小桜町二丁目四
毎月二十四日、午前・午後。

市バス、御器所通り。又は北山下車。

地下鉄、御器所通り下車。

○蓮光寺修道会。毎月七日午後一時半。

（但し日曜を除く）尾西市三条板倉
名鉄新一宮駅よりバス、西三条下車。

定 価 半年 七〇〇円（送共）
一年 一四〇〇円（送共）

編集・発行人 花田 正夫
名古屋市南区駈上町二ノ八八

電話八二一七〇三七番

印刷 愛知県西加茂郡三好町大字福谷
刷 人 坂部 光雄

發行所 名古屋市南区駈上町二ノ八八

振替口座 名古屋 一〇四七〇番

郵便番号 四五七

慈光 第三十二卷 第三号 昭和五十五年三月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
昭和 二十四年七月二十三日 第三種 郵便物 認可